

# コロナワクチン優先順位低い

各地で再び感染が拡大する新型コロナウイルス。コロナの怖さは、回復してから後も後遺症とみられる症状に苦しむ人がいることだ。若い世代の感染が増える中、四月に名古屋市内のクリニックが設けた後遺症外来では、患者の半数を二十〜三十代が占める。重症化しにくいとして若い人はワクチン接種の優先順位が低い。医師らは感染への警戒を怠らないよう、くきを刺す。

(細川暁子、白名正和)

## 名古屋のクリニック

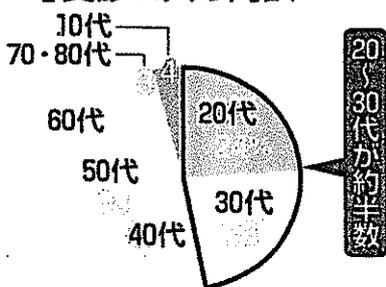
七月下旬、名古屋市中東区の愛知医科大メディカルクリニック。後遺症外来を訪れた岐阜県内の会社員男性(仮名)は声を絞り出した。「ひもで締め付けられるような頭痛が続いている」

男性が陽性になったのは五月上旬。血を吐くほどせきが続き、肺炎を起し、中等症の状態に。みそ汁などを飲んで

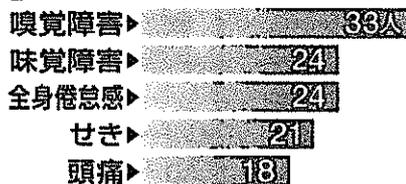
でも味がせず、においも感じなくなった。

味覚と嗅覚の障害は今も残るが、しんどいのは頭痛だ。床が波打つように感じるため、六月から仕事に戻ったものの、二週間ほど一度は起き上がれずに休んでしまう。「職場に迷惑がかかる」と受診を決めた。診察した呼吸器・アレルギー内科医の河合聖子さん(仮名)は、頭痛などの改善効果がある漢方薬を処方した。

## コロナ後遺症外来 受診91人の内訳

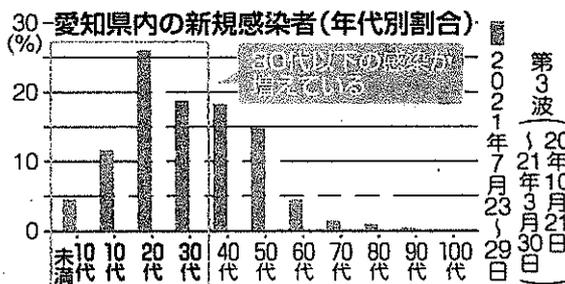


## 5人以上が訴えた主な症状



※今年4〜6月、愛知医科大メディカルクリニック調べ

# 後遺症外来の受診半数



30代

四〜六月に後遺症外来を受診した九十一人のうち、最も多いのは二十代で24%、三十代が23%で続く。男女別では女性が57%、男性が43%。症

## 感染も増加「警戒続けて」

状は嗅覚障害が最多で、味覚障害、倦怠感、せきが続いた。何らかの症状が二カ月以上続いている人が約半数を占め、平均は八七・六日だった。同クリニックでは院内十三の診療科が連携。まずは内科医が話を聞き、嗅覚障害なら耳鼻咽喉科、記憶障害なら神経内科、不安などのうつ症状なら精神神経科というようにつないでいる。一人が複数の症状を訴えるケースが多いのが特徴という。

河合さんによると、息苦しさや訴える人の血液を検査すると、炎症反応を示すCRPの値が上昇している場合がある。一カ月弱のステロイド薬の処方改善する例もあったという。「放置してはいけない」と呼び掛ける。

感染に伴う嗅覚障害は、若い人ほど出やすい傾向がある



頭痛やめまいなどに悩み、後遺症外来を受診した男性(仮名)名古屋市の愛知医科大メディカルクリニックで

る。金沢医科大耳鼻咽喉科教授の三輪高喜さん(仮名)のグループは二〜五月、愛知や石川など五都府県の病院や施設で入院・療養中の中等症以下の患者(二一〜五十九歳)を調査。回答のあった二百五十一人のうち、嗅覚障害を自覚している二一〜三十代は70%以上に達し、四十代の60%、五十代の35%を上回った。

グループでは退院三カ月後、六カ月後も調べ、症状の持続期間などを調べる。三輪さんは「嗅覚や味覚の障害は、食欲がなくなったり孤独に陥ったりして、うつ症状につながるリスクがある。あなどってはいけない」と指摘する。

最近では、若者の感染者増加が顕著だ。東京の場合、感染者が四千人を超えた七月三十一日は、三十代以下が約71%を占めた。愛知も同二十三〜二十九日の一週間は三十代以下が約61%と、第二波(昨年十月〜今年三月)を15割も上回っている。

愛知医科大メディカルクリニック長の馬場研二さん(仮名)は、受診する人の半数が二十〜三十代であることから「コロナ自体は軽症で済んだとしても、後遺症に苦しむ可能性がある」と強調。「若者はワクチン接種の優先順位が低い。大勢での会食を控えるなど感染しないよう気をつけて